「蒼き獅子王の刃」（伝奇小説「組合員の日常」３）

宇曽田善武

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「蒼き獅子王の刃」（伝奇小説「組合員の日常」３）

【Ｎコード】

Ｎ６９０２Ｆ

【作者名】

宇曽田善武

【あらすじ】

怪獣が街で暴れている。その報告を受け、駆けつけた組合員が見たものは……。霊や妖怪等の怪異が出現する確率が跳ね上がった社会で、その対応に追われる便利屋『超常事象復旧協同組合』、略称「組合員」の日常を描く短編です。同じ背景世界、人物を使った各話完結の短編です。

クラクションがオーケストラ演奏されている渋滞路は、路側帯も停車した車で埋め尽くされていた。にもかかわらず、走行可能なわずかな空間を風精に教えてもらいながら愛車ＹＡＭＡＨＡ・ＤＴ２３０ランツァを無理矢理に走らせる。

（マエ　ナイ　ミギ）

脳が「声」を聞いたときには、風精と接続したて得られた視覚、上空からの視野、前方３０ｍ地点の左右視野に、おれ自身の眼球映像を加えたの映像の処理を終え、最適ルートを算出する。

前輪急制動、ロック、加重移動を前、バイクの後輪が浮く。ハンドルを軸に全身を左に倒す。連られて車体が９０。傾いた。後輪接地。その瞬間に切っていたクラッチをつなぐ。急加速。前方に中央分離帯の植木。全力で後ろ加重、アクセルを開けつつ後輪制動、ロック、後輪スライド。分離帯のブロックにタイヤが当たった所で再び加速。

そんなアクロバット走行をくり返し、怒号を浴びながら駆けつけた現場では、白色の体表から稲妻をほとばしらせて極小の魔竜が咆吼していた。

トラック2台、乗用車１２台、バス1台を巻き込んだ大惨事の中に奴はいた。

竜。

背中から2列に並ぶ異形の巨大な突起を生やし、奇妙に直線的なシルエットで構成された怪物を、あえて既存の生物になぞらえて呼称するならそう呼ぶしかない。いや、生物というのは適切ではないだろう。白い装甲で全身を包んだその体は機械に近い。むしろ、機械そのもの、ロボットの竜と呼んだ方が適切だろう。体高は３０ｃ

m、全長は６０ｃｍ弱。小型犬程度の大きさしかないそいつは、圧倒的な存在感を放っている。

横転し、炎上したトラックのタイヤがホイールごと切り裂かれていた。深い溝が等間隔で４本走っている。鉄板の断面を見ると、鋭利に切り裂かれた上に高熱で処理されたらしいことが読みとれる。奴のかぎ爪が引き起こした惨禍の一つだった。

ストライク・レーザークロー。

中学生が知っている単語を並べて作りそうな武装の名前が次々と脳裏に浮かぶ。

荷電粒子砲、エレクトロンファング、ストライクスマッシュテイル

Ｅシールド展開型エレクトロンドライバー・バスタークロー

知っている。オレは、多分奴を知っている。

「一式、すまん。突然、あの怪物が出現してな。手がつけられん」

防刃ベストを着用してでかい体をさらに分厚くさせた横峰が、拡声器で避難指示を出しながら駆け寄ってくる。ガソリンの黒煙をあび、地面を転げ回ったのだろう、服はすすけて、すり切れている。横峰の部下の警官達も、少なからず負傷しているようだ。

「ああ、横峰、正解だ。あんなの、まともに相手して手に負える奴じゃないぞ。」

天に向かって咆吼する小さな魔竜を見つめたまま、オレは半ば呆然としていた。

「なぁ、一式、あいつ何なんだ。」

「前に、怪人が暴れたことあったろ？同じだよ。」

「同じって、着ぐるみか？」

「違う、あれは」

セラミックのようにも、チタン合金のようにも見える白い装甲は、なぜか安っぽいプラスチックのようにも見える。赤く光る目、全身の関節に施されたリベット。奴が駆動するたびに聞こえてくるモーター音は、昔、聞いた記憶がある。

「おもちゃだ。トイミーのゾディだよ。」

工作好きで、少し高めの年齢の子どもを狙った組み立て式のおもちゃがあった。動物をモチーフにしたロボットの中には、ゼンマイやモーターが組み込まれ、歩行したりしっぽを動かすギミックが売りでかなり人気があった。各商品には架空の惑星Ｚ００を舞台にした短い物語が記されており、新しい商品が発売されると連作小説が進んでいくような楽しさがあった。

奴は、ティラノサウルス型に分類される最後期の魔竜だ。「バーサーク・カイザー」狂った皇帝。本当に狂いやがった。後期の商品は、中型サイズで機動力と火力の高いモデルが売りだった。ガキのおもちゃがどんな経過で怪物化したのかわからないが、奴の成立に人の思いが絡んでいるのであれば、その力はおそらく。

鳴り響くサイレンがオレの思考を中断した。遅まきながら、渋滞をかき分け消防車が到着したのだ。深紅の塗装が燃えさかる炎に良く映えている。目立ちすぎる赤い外装で巨大な音を立てる大型車は、少しばかり刺激的すぎる。

「横峰、消防車のサイレンを消せ、下げさせろ！」

叫びながらオレは駆け出している。

まずい、天に向かって咆吼していた奴は、視界に消防車をとらえた。ゆっくりと腰をもたげ、背中の突起を前面に展開する。１ｍにも満たない奴の体に、落雷にも匹敵するようなエネルギーが蓄積さ

れていく。
ポケットから呪符を引き出し、空中に放つのと、奴の背中が光るのが同時だった。
無数の稲光が赤い車に迫る。
頼む、効いてくれ。通常詠唱は間に合わない。効果は落ちるが、心象詠唱で呪句を念じ、符を解放する。
＜雷神の盟約にしたがいて、御雷の落ちることを禁ず。桑原桑原＞

奴の背中に生えた十二対の突起から生み出された高電圧の雷撃は、オレの放った符へと目標を変えた。中位雷撃呪ぐらいなら吸収できるはずの、結構値の張る避雷符が瞬時に紙くずと化した。
電子戦用装備エレクトロンドライバー。プラズマエンジンから生み出される高電位の電圧を、１２対の背面バスタークローから収束させ打ち出す。雷撃の打撃だけでなく、機械の電子頭脳に異常を引き起こす副次効果を伴う危険な装備。直撃していれば、消防車の機能はもちろん、生身の消防士たちは体内の神経系に流れる電流を狂わされ、発狂、または心停止に追い込まれていただろう。
悪い予感が当たった。何者かの想念で具現化した奴は、たかがおもちゃの分際でありながら、架空世界で設定された幻想の性能に限りなく近い能力を保有している。中学生どころか、小学生にもわかりやすいように設定されたオーバースペックの羅列が具現化する。その言葉の意味を自分で想像し、恐怖した。洒落になってない。
そして、初撃を邪魔された奴は、オレを認識した。
初期の肉食恐竜をモデルにしたゾディは、恐竜の研究が未発達だったこともあり、尾をだらしなく引きづり、直立した姿勢をもつ鈍重な姿をしている。ティラノサウルスというより、怪獣映画の恐竜をモデルにしたそいつらは、鈍重だがたくましい格闘能力を持つ、という愛らしい設定だった。だが、ラプトルをはじめとする鳥盤類の俊敏な動きについての研究が進んだ後に開発された、後期型のゾディは、尾を後ろに高々と挙げ、深い前傾姿勢を取り、その発達し

た脚力で俊敏に飛び出す姿をしている。俊敏で、力が強く、おまけに武装は強力。どこの完璧超人なんだという反則性能を有する奴が、逆間接の発達した足を踏み換え、オレに正対する。そして、奴は、ストライククローを振り上げ、目を赤く光らせた。

高速で動く小さな的に拳銃は効果がない。奴を刺激しないように、ゆっくりと、ゆっくりと両手を腰のホルダーにおろす。伝導トンファーのグリップに手が届いた。その瞬間。

来る。

奴が動いた、と思った次の瞬間には、１５ｍの距離を詰め、おれの左膝を切り裂きに来る。速い。設定速度時速３４０ｋｍは伊達ではない。

左手のトンファーを下段払いで叩きつけつつ、体を半歩開き回避。念を込めた伝導トンファーとはいえ、奴の一撃を完全にはじくことはできず、半ばまで切断される。だが、それは計算ずみの事象だ。爪をトンファーに食いませた奴の動きは、ごくわずかに停止する。そこに、右のトンファーをたたき込む。チェックメイト、のはずだった。

奴の戦闘能力、とりわけ戦術行動を甘く見ていた。ストライククローが止められた瞬間、奴は背中に装備したイオンブースターユニットを全力で噴射する。重量１ｋｇにも満たないはずの奴の体は、瞬時に設定重量１２７ｔの幻想を発揮し質量を増加させる。突然の加速と圧力が左手にかかる。無意識下で、「ガキのおもちゃに負けられるか」と妙なプライドをもって押し返そうと反応したことが致命的な失策になった。トンファーを捨てろ、と思考した時には、圧力に負け左手ごとオレの体は重心を崩され流されている。

今度は理屈ではなく、体が反応した。逆らわず、右足で地面を蹴り、体全体を大きく左にはね飛ばす。その瞬間、オレが立っていた位置に青白い光が流れていく。

バーサークカイザーの主砲・口腔内荷電粒子砲、正しくはその幻想を具現化した高エネルギーの何かよくわからないもの、が直進し、

背後にあったビルの壁面に大人がくぐり抜けられるぐらいの穴を開ける。
右手を振り抜き、空中で体をひねる反動を得ると同時に真下にいるはずの奴にトンファーをたたき込む。手応えはなく、遅れて視認したときに唖然とした。
荷電粒子砲モドキの残光も消えないうちに、奴はブースターを逆噴射させ、間合いを確保している。オレとの距離は２ｍ。こちらは着地まで推定あと０，３秒。
奴の背中の突起がこちらにむけて隆起している。消防車を破壊しかねないエレクトロンドライバーがオレの着地点に照準を合わせて発射態勢に入っている。冗談がきつい。
右のつま先が地面に接地、まだ動けない。奴の１２対の突起が横に開く。右足がかかとまで接地、足首だけの力で地面を蹴りつつ、全身をひねる。アスファルトの感触を体に受けながら、青白い電光が空中に放射されるのが目に入ったが、無理をして意識から追い出す。
地面を転がっている最中に奴から視線が外れてしまった。奴は、必ず次の動きに出る。本来、奴の体長は２２ｍ、重量は１２７ｔ。ライオンが猫の大きさになれば、最高速度の絶対値は低下する。だが、俊敏性は大幅に向上するだろう。設定数値で最高時速３４０ｋｍの幻想をもつ奴が、その性能を具現化しつつ、全長を４８分の１の５０ｃｍ程度にまで圧縮したとしたら、どれだけの敏捷性を持つか、想像するだに恐ろしい。
奴の現在占位可能地点を予測、最も危険な位置を想定する。左後方。直感が外れたらアウト。左手を真後ろに引き、手首だけでトンファーを回転させた。
鈍い衝撃。手応え有り。
オレの首筋をかききろうと飛びかかってきた奴を、博打のように

振ったトンファーが奇跡敵に殴打する。手首だけでは十分な打撃を与えられないが、奴を押し返すことには成功した。
だが。
吹き飛ばされた奴は、当然のごとく起きあがった。再び奴と向き合う。距離は３ｍ。こちらから打撃を仕掛けるには遠く、術を仕掛けるには近すぎる。一方、奴にとっては、飛び込んでの近接戦闘も、このままの砲撃もやりたい放題の間合い。まずい、分が悪すぎる。

そのとき、突然水霊たちのざわめきが聞こえた。
「一式ィ、ぶっかけるぞ」
横峰の声とともに、突然大量の水が襲いかかる。水、高圧？消防車か！？横峰の奴、ポンプ車に搭載されたコンプレッサーで圧縮された高圧の水をぶっかけてきやがった。
横殴りに襲いかかる水に視界を奪われる。１リットル１ｋｇの物体が圧力をともなってたたきつけてくる。
痛い、冷たい、痛い。あのバカ、むちゃくちゃしやがる。

だが、これで奴との間合いを仕切り直せた。はっきりわかった。奴に近づいてはだめだ。
人間では勝てない。絶対に勝てない。

水圧を押しのけ、奴が現れる。が、動きは鈍い。もとは電気回路を搭載するオモチャ。水は得意ではないようだ。とはいえ、近接戦闘を仕掛けるのは自殺行為。オレの魔術で奴を止めるには、詠唱時間が足りない。拳銃は当たらない。手詰まりだ。

「カイザー、もうやめて、やめてよ。」
突然、子どもの叫び声が響いた。奴は、明らかにその声に反応した。奴の視線がそれる。ごくわずかな隙。最後のチャンス。

瞑想開始、高次元空間に意識を接続。
白く気高い姿を幻視する。
ごく自然に、敬意を伴いながら恭しく詠唱が口から流れ出る。

「わだつみよりきたれ、命の源、
日輪の輝きによりて、天高く舞い上がれ。
高き所、あまつ海原に飽いたら、
再び集いて、白き雲海となし、
この地に舞い降りよ、みずちの王。
式の盟約により、
我が眼前に御身の威光を輝かせよ。」

呪句の詠唱を終えたとき、ポンプ車からまき散らされる水が、突如生き物のように蛇行を始めた。高位精霊召喚特有の脱力感が襲う。が、ここで意識を切るわけにはいかない。
水竜となったポンプ車の水流を操り、狂気の魔竜に巻き付かせる。
全方位から襲いかかる数十トンの圧力、電気で動く機械には天敵となる水。
これで倒せなければ、オレに打つ手はない。

バーサーク・カイザーの苦悶に満ちた咆吼が流れる。
いける。魔力を帯びた水流の壁は奴の動きを封じ、幻想に裏打ちされた堅牢な装甲をも
押しつぶしていく。消防車の放水を媒介にした水龍の召還。オレの乏しい魔力を根こそぎ奪うことになるが、それでも奴に打ち勝つのであれば安い代償だ。

だが、水竜はとつぜんやせ衰えていく。オレの魔力はまだ枯渇していない。とすれば。
ポンプ車を見る。消火栓に接続しているわけではない。自前の搭

載タンクによる緊急放水は、当然のことで限界がある。

　水流の衰えは、水竜を衰えさせ、彼と意識を共有するおれ自身も急速に衰退していく。まだだ、せめて後３０秒は続けなければ、奴を押さえられないのに。

　弱った水流を突き破り、イオンブースターを展開した魔竜が飛び出す。

　あちこちの装甲に亀裂が入っているものの、その動きによどみはなかった。

　封印の外に出た奴は、弱り行く水龍を尾の一撃により消し飛ばす。

「カイザー、無事だったんだね」

まただ、また子どもの声が聞こえる。奴も、声の主を見ているようだ。だが、声の主を確認するには、オレは弱りすぎていた。まずい、今奴を防ぐ力はない。

だが、オレをひとにらみした奴は、そのままブースターをふかし、ビルの合間に消えていった。

　ひざが落ちる。不釣り合いな高等呪を使った代償が体をむしばんでいる。

　横峰が駆け寄ってくる。悪い、取り逃がしちまった。

相棒の太い腕に支えられると、無念さよりも安心感が勝ってしまった。情けない。

　意識を失う前に、オレに出来たことは、辛うじて「あの声の主」の保護を頼むことだけだった。

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――

兄ちゃんはすごいモデラーだったんだ。ホビーグラフィクス、うん、模型雑誌の。あのコンテストでは何回も入選してた。だから、模型には厳しくて、かっこいいロボットがあっても全然触らせてくれなかったんだ。塗装に指紋が付く！とか、動くな、埃が舞う、とか口うるさくてさぁ。

でもね、ゾディだけは違ったんだよ。誕生日にね、兄ちゃんが作ってくれたんだ。僕のために。ブレード・ライオネルって知ってる？アニメで、ベンが乗る奴だよ。でも、兄ちゃんが作ったらそんなの目じゃないんだ。青一色なのに、光の加減で虹色に光って見えてさ、すっごくきれいなんだ。それにね、ほら、ゾディって下手な奴が作ると、改造だ！とか言ってゴテゴテ武器を付け足すでしょ？でもさ、兄ちゃんは違うんだ。余計な物を付け足したりはしないで、むしろ要らない物を取っ払ってさ、「ぜーにくをそぎおとす」って言ってたっけ。そんでさ、兄ちゃん、高専ってとこで、機械のことも勉強してたでしょ。だから、モーターとかもつけ直してさ、すっごいんだよ、普通だったら、ガー、ガーって感じで動くのに、兄ちゃんのライオネルは、キュイ～ン、キュイ～ン、シュシュ、って感じでさ、全然違うんだよ。

大惨事を引き起こした小さなオモチャの魔竜の正体を知る少年は、おびえながらも警察の任意事情徴収に協力してくれていた。初めは、緊張していたようだが、ゾディのことを話しているうちに、少年の言葉にはどんどん熱がこもってきた。隣で横峰が難しい顔をして「一式、通訳してくれ」と口をはさみかけるが、問答無用で黙らせる。少年の目を見て、頷き、先をうながした。

とにかく、兄ちゃんが作ったゾディはすごかったんだ。不安になってさ、「触ってもいいの？」って聞いたら、兄ちゃんがいったん

だよ。「プラモデルは、美術品だ。触る物じゃない。でも、ゾディは工芸品だ。だから動かして遊ぶ方が正しいんだ」だってさ。よくわかんなかったけど、兄ちゃんもゾディが好きなんだな、って嬉しかったんだ。

それでさ、僕も兄ちゃんのためにゾディのことを教えてあげたんだよ。バトストとか。ほら、バトルストーリーのことだよ、おじさん。わっかんないかな〜。そうそう、惑星Ｚ００の歴史だよ。アニメとは設定が違うでしょ。兄ちゃん、アニメの方もあんまり詳しくなかったんだけど、バトストのことは全然知らなかったんだよ。Ｚａｄ２０４５年の大異変で旧大戦が終わるまでのことも兄ちゃん知らなかったんだ。それでね、一つ一つ教えてあげたんだ。兄ちゃん、ほら宇宙世紀のプラモでも、ザイオン側ばかり作ってたでしょ。だからさ、兄ちゃん、ゾディも共和国より帝国の方が気に入ってさ、ジェノバスターとか作ってたんだ。特に旧帝国の遺産とかツボに入ったみたいでさ、バーサーク・カイザーのスゴイのを作ったんだよ。だって、ホビーグラフィクスで金賞だよ？すごくない？あんまりすごくてさ、僕のブレードライオネルが勝てなくなるから、文句言ったら、今度、ブレードをパワーアップしてくれるって約束してくれたんだ。

それなのに、ね、

そこで、少年の声が落ちた。

そこから先は、楽しい話ではないのだと、少年にとっては何よりも辛いことだとわかっていながら、オレは先をうながした。

兄ちゃん、作れなくなっちゃたんだ。コンテストに出したカイザーが返ってきてさ、模型屋に受け取りに行った帰りにね、トラックにはねられたんだよ。

横峰がメモを走らせ、部下に渡した。オレも、携帯に意識を接続

し、知り合いの情報屋に調査を頼む。

それでね、兄ちゃん、病院に運ばれるときにさ、ごめんな、ヒロシって謝ったんだって。謝ってもらったって困るよね、そんなこと聞きたいんじゃないのに。

そんでさ、兄ちゃんが持ってたはずのカイザーがいなくなっててさ、オレ、毎日あそこで探してたんだ。そしたらさ、今日、カイザーにあえたんだよ。でもさ、嬉しくないよ、あんなの、兄ちゃんのカイザーじゃないよ。

そこからは、ほとんど聞き取りにならなかった。嗚咽を始め、瞬く間に泣き崩れていく少年を、慣れた手つきでベテランの婦警さんがなだめてくれた。

知り合いの情報屋からの返事が入る方が、横峰たちが事故ファイルを探し出すよりも速かった。

文字情報と共に、静止画像が脳内に展開する。7月某日、14：32分、商店街の交差点で接触事故。被害者は17歳の高等専門学校に通う男性。搬送先の病院で死亡。所持品・カバン、財布、キーホルダーとカギ束、プラスチックケース。

『コンテストに出したカイザーが返ってきてさ、模型屋に受け取りに行った帰りにね、トラックにはねられたんだよ。』

横峰が持っているファイルをのぞき見た。やはり、所持品の中に受け取っているはずの奴がいない。強い思いを受け作られ・使われた道具には魂が宿る。

そして、古来よりひな人形を形代として川に流し、子供たちの無病息災を願ってきたように、生き物の形代となる人形は、たやすく想念を吸い込む。

兄弟との約束を阻んだ主の無念をはらすため、機械仕掛けのオモチャは魔竜と化した。

ならば、その想念に打ち勝つためには、こちらもそれなりの用意が必要だ。

「ヒロシ君、頼みがある。あのカイザーを止めたいんだ。」

少年は、下を向いたままだった。だが、嗚咽はとまった。

「力を貸して欲しい。兄さんは、バーサークカイザーが暴れることなんか望んでない」

顔を上げた少年の目は、赤く腫れていたが、闘う決意に満ちていた。

それから、準備には3日かかった。その間、オレはほとんど寝ていない。

「一式、ほんとに、こんなので奴は来るのか？」

事故現場の交差点におかれたトラック。ヒロシの兄を撥ねた飛ばしたまさにその車両だ。

「ああ、奴はむやみやたらに暴れているように見えるが、狙っていたのはトラックと、消防車だけだ。その他の事故は、全て人間のパニックが引き起こしている。あいつは、大型車両を標的にしている。

それだけに、このエサには食いつくさ。今、１４：３０分、そろそろ来るぞ。」

周囲は交通封鎖され、トラックだけが残されている。秒針が３６０。円を描き、さらに時を刻む。

こちらを見つめる獣の目を感じた。来る。

突如、雷光が落ちた。続けて、上空から一直線に白い流星が降る。数瞬後、トラックの運転席のフロントガラスが細かく砕け、内側から弾け飛ぶ。

上か。道路の四方に集中していた警戒網は見事に突破されていた。そして、細く鮮烈な光がトラックを建てに貫いた。

文字通り瞬きもしないうちに、防衛対象であったおとりのトラックは炎上してしまった。

だが、奴の襲撃能力が予想を上回る速度であったとはいえ、ここまでは予測通りの展開だった。奴の作戦目的が、単なる大型車への復讐ということであれば、この成功で奴の想念が使命を終え、解き放たれる可能性は十分にある。ならば、わざわざ危険を冒す必要はない。

無論、その期待が、予測ではなく単なる願望にすぎないことは知っている。

だからこそ、オレはすでに奴と闘うための最適手段を用意しているのだ。

炎上するトラックに仁王立ちし、奴は天に向かって咆吼した。

そして、エアインテークを兼ねていることになっている口で大きく息を吸い込むと、小さな口腔をいっぱいに開き、その内部に仕込

まれた破壊兵器を無秩序に照射した。

商店街そばの国道から続けざまに放たれる光線は、すでに車としての機能を失った車体に次々と穴をうがち、ガラスを打ち砕き、コンテナを吹き飛ばし、破片を道路上に振りまく。

やはり、奴を止めるには力が必要なのだ。

『同調開始』
術式を発動する。
『伝導回路接続、終了』
オレの呼吸により生み出される力が、小さな筒に連動し、回路の中にあふれていく。
『聴覚接続、終了』
爆発する音がやたらに響いて聞こえる。アスファルトからのうねり返しが間近すぎる。
『視覚接続、終了』
視界が急に下がった。地表約１５センチ。
『触覚接続、終了』
急速に、四肢の感触が変わる。風がやたらと肌に冷たく感じる。
『全感覚接続、同調完了』

接続した体の状態を確認する。

動力部伝導プラズマエンジン、始動
前肢ストライククロー、ＯＫ
背部バックパック出力良好、
２連イオンブースター、ＯＫ
側部高周波ブレード、左右ＯＫ
顎部エレクトロンファング、ＯＫ

頭部生体センサー、目標を感知
全間接サーボ、ＯＫ

いける。
ブレード・ライオネル改、出る。

それは、夢のような光景だった。
いや、夢としか思えない。
大好きな兄の残してくれた大好きな蒼い獅子が、兄が作ったはずの恐ろしいゾディと
市街地を縦横無尽に走り回って闘っている。

両機ともに、設定に忠実に間接を駆動させ、ブースターをふかし、信じられないほどの
速さでアスファルトを疾駆していた。交錯しては、火花を散らす。
トラック相手にはあれほどの威力を発揮したバーサークカイザーの武器も、
高速で動き回る小さなブレードライオネルには当たらない。
必然と、両機は近接戦を仕掛け合うことになる。

一式さんの書いてくれたバトルストーリー思い出した。

バトルストーリー
　ＺＡＤ２１０８年、突如出現したバーサークカイザーに、共和国の交通網は破壊された。
共和国は多大な被害を出しながらも、偶然居合わせたウォータードラゴンとともにこれを退ける。だが、バーサークカイザーは再び襲

撃する。
混乱の中で、共和国は一台のゾディに活路を見いだした。ブレード・ライオネル。かつて、この大地に平和をもたらした英雄の機体が残っていたのだ。共和国の人々を守るため、イッシキ少佐は旧式のブレードライオネルに改造を施し、最新鋭の狂気バーサークカイザーに挑む。
果たして、古き獅子王を駆り立て、狂える魔竜を止めることはできるのか。

一式さんは、彼がこの物語を信じることが大切だといった。
幻想が具体化したバーサークカイザーを止めるには、同種の幻想が必要だ。
だが、命をかけた強い思いが具現化したカイザーは、単純に強い性能の機体を
もってきても止めることはできない。
バーサークカイザーを止めるのは、同じだけの思いの詰まった機体、つまり、彼のブレードライオネルしかいないのだ。そう教えてくれた。

「君の大切なゾディを傷つけてしまうかもしれない。でも、必ずカイザーを止める。それだけは約束する。」

そう言った一色さんは、ひどく彼の兄に似ている気がした。実際、一色さんは彼の兄によく似ていた。模型の知識も技術も豊富だった。
瞬く間にブレードライオネルを分解すると、彼の兄にしかわからないはずの改造された内部回路を補修し、奇妙な宝石を埋め込んでいく。魔力と気を伝達する心珠なのだそうだ。
そして、外装の強化も独特でありながら、兄と似ていた。

危ない！
一式さんの操るブレードライオネルの強力な高周波ブレードによる振り抜きは、大胆にもカイザーが牙で咬み止めていた。
至近距離で、バーサークカイザーの背中が持ち上がる。エレクトロンドライバーを広域に展開する気だ。逃げ場がなく、避けようのない電気攻撃は、ブレードライオネルの内部を、パイロットに致命傷を与えるはずだった。

だが。

ブレードライオネルの背部バックパックが割れる。中から出てきた2本の巨大な円筒。
ドラムコンデンサー。
ライオネルシリーズの最新鋭機、ライオネル・ゼロ・イクスの装備。電子ステルス戦を得意とするイクスは、このドラムコンデンサーで高周波の電磁波を展開し、あらゆる電子攻撃を無効化する。Eシールドでは防げないバーサークカイザーのエレクトロンドライバーも例外ではない。

「君のお兄さんが作ったものに勝手につけ加えるけど、許して欲しい」
そう言った一色さんは、驚くほど高価な自分のゾディを惜しげもなくばらして部品を取り始めた。コトブキ堂製のライオネル・ゼロ・イクス。本来トイミー社が数千円程度で販売していたオモチャの外見を極限まで高め、惜しげもなく高級素材を使い倒した大人のわがまま玩具。確か、４万８千円ぐらいしたんじゃなかったっけ？小学生のヒロシには想像もつかない世界だ。

オレは、共有する感覚から流れ込む電子流に歯を食いしばって耐えた。
翼のように伸ばしたライオネルの高周波ブレードは、無惨にも魔竜にかみ砕かれ、止められている。
電子戦技術に対応していないブレードライオネルは、本来バーサークカイザーと戦える機体ではない。だからこそ、奴に油断が生じる余地があった。エレクトロンドライバーを直撃させるだけで勝てると判断し、牙でかみつくという無茶をしてまでライオネルの足を留めた。その油断を叩く。
装備を移植したとはいえ、本来の装備ではないドラムコンデンサーはそれほど長くジャミングを続けることはできない。
だが、エレクトロンドライバーも奴の全身の能力を使わないと撃てない一撃だ。
仕留めるのは、今しかない。

頼む、ブレードライオネル、お前の大切な人の思いを、守ってくれ。

かみ砕かれたはずの高周波ブレードに再び光が走る。

「ブレード、行け～！！！！！！」
ヒロシの声が聞こえた。
背面イオンブースター、最大出力。
幻想の青い炎が吹き上がる。

蒼き獅子が咆吼した。

蒼き閃光が、アスファルトの上を走り抜けた。

顎から尾の先まで、一直線に切り裂かれたバーサークカイザーの動きが止まる。

勝った、本当に、勝った。
僕のブレードライオネルが、兄ちゃんのバーサークカイザーに勝った……
ヒロシは、その光景に見とれていた。
だから、反応が遅れた。

バーサークカイザーによって破壊されたトラックは、炎上を続けていた。
積み荷を抜き、ガソリンもほとんど抜いていたため、火力は少ないはずだった。
だが、その乏しい火力であっても、ガソリンの爆発は車の破片をはじき飛ばすのに十分な力を持っている。灼熱したエンジンルームの拳半分ほどの破片が飛んだ先に、その車が命を奪った男の弟が立っていた。

あ。

危ない、という一式さんの声が聞こえた気がして、上を見た。なんだか、赤いものがこっちに飛び込んでくる。
多分、怖かったと思う。足が動かなかった。視界の中で、どんどん大きくなっていく赤いものをただみていた。

ブレードライオネルは、動けなかった。すでに、オモチャとしての限界を超えている。
ならば、オレが動くしかない。意識接続を切り、すぐに動けば間に合うはずだ。間に合わせる。間に合え。
だが、あまりにも深く伝導の玩具と同調していた体は、人間としての動きに対応できない。手が地面をかこうとする。それでは遅い。間に合わない。

横峰が走っている。警官たちも。だが、だれもが間に合う距離ではなかった。

人間は、視界から消えるほどの驚くべきスピードで動くことはできないのだ。
本物のゾディのように。

だから、本物のゾディが動いた。
頭部を半分失い、背骨を中心に全身を上下２つに切り開かれながら、
バーサークカイザーは最愛の主が最も愛した男の元に駆ける。
イオンブースターがとぎれとぎれに噴射し、崩壊した体では姿勢制御もままならないが、あとひとたび、ほんのわずかだけ、跳躍する力があればよかった。
２００g程度の燃えさかる鉄片を道連れに、
街を震撼させた魔竜は、その命を終えた。

兄ちゃん、兄ちゃん、そう叫びながら、かつては白かった魔竜の残骸を抱きしめて。
少年は泣いていた。

「あいつ、復讐が望みじゃなかったんだな。」
横峰がつぶやいた。

ああ。そうだな。
孤独に模型を作るしか能のなかった優しい男の思いが込められた、破壊するだけの機能を模したガキのオモチャ。あいつは、何かを壊したかったんじゃない。

ただ、守りたかったんだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6902f/

「蒼き獅子王の刃」（伝奇小説「組合員の日常」３）

2010年10月21日21時07分発行